

愛媛電友会会報

第 12 号
 発 行 人 山 崎 義 己
 発 行 所 松 山 市 南 持 田 町 3 番 地 40
 電 気 通 信 共 済 会
 四 国 支 部 内

目 次

○ 南予では待望の懇親会を八幡浜で開催八幡浜 玉井 記……一頁	○ お 知 ら せ……………編 集 部……二頁
○ 電友会会費増額について……………編 集 部……二頁	○ 随 想……………編 集 部……二頁
○ 愚陀仏庵雑記……………高橋林二郎……三頁	○ あッノ危い!!死神とすれちがい……………二神 武弘……四頁
○ ていれぎ記……………松 山 山崎 義己……六頁	○ 短 歌……………松 山 山崎 義己……七頁
○ 追 憶……………松 山 藤田 基孝……七頁	○ 鳴呼 小崎さん……………松 山 山崎 義己……七頁
○ 編集後記……………山 崎 生……八頁	

南予では

待望の懇親会を八幡浜で開催

電友会も年々会員が増加し、会の活動も活発化しつつあることは、ご同慶にたえないところで、特に年一回の総会は会員の交友を深め、生きる喜びをかみしめる楽しい一日である。しかしながら年一回の会合では、待ち遠しいので春の四月頃小範囲で会合し、お互いに時間のある限り懇談したいとの希望が近年多くなったので、南予在住の会員三二名に呼びかけたところ一七名の参集を得ることができ、今後の方針等を決定して盛会裡に散会した。当日決定した主な事項は左のとおりである。

一、本年は準備の都合で六月二十八日開催となったが明年からは四月上旬とし毎年開くこと。

二、案内先は会員に限定せず可能な限り退職者全員に呼びかけること。

三、長らく病気のため本日出席されなかった三氏（大洲市寺谷政市、宇和島市吉見春雄、大森計一）に南予在住者懇談会の名でお見舞状を出すこと。

四、北宇和郡近永老人ホームに入所中の大久保定寿氏に近況照会と共に激励の手紙を前号同様の名で出すこと。

「右大久保氏の略歴は次のとおり」

同氏は明治二十四年生れで大正七年宇和島局駐在、通信工夫として採用され以後野村、松丸、旭、卯之町局に駐在し昭和十九年退職、郷里北宇和郡明治村目黒で農業をしていたが、不馴れのため畑を売って卯之町へ転居し、行商等をしていた。夫婦には子供がなく養子を得た。その頃養子は八幡浜局機械係を勤めていたが、どうしたとか次第に素行が悪くなり遂に退職したのみか行方不明となったので、嫁は子供をおいて実家へ帰ってしまった。両親を失った子供は祖父母の大久保夫婦が養育していたが、ふとした病がもとで妻が死亡し、以後は町役場からの扶助でかろうじて生活していた。

昭和三十五年頃行方不明の養子が

九州にすることが分り、しばらく

養子夫婦と同居していたが、不和となり一人淋しく郷里へ帰り近永老人ホームへ入所した。昭和四十二年病気のため県立近永病院へ入院し療養していたが四十五年六月二十三日淋しく八十歳の生涯を終えられた。一生の大部分を電電事業に捧げられたが、退職後は訪れる人も少なく家庭事情も影響して晩年は淋しい毎日であったと思います。私達で同氏の冥福を心からお祈りし毎日を元氣よく暮ししたいと思います。

激励の手紙は六月三十日出しましたが「本人死亡につき返戻する」との付箋つきで還ってきました。僅か一週間の違いで私達の気持ちを生存中にお伝えすることができず残念でなりません。

「付記」

懇親会は十一時開会、十六時散会した。

一人一、〇〇〇円の会費で酒、昼食、通信費等をまかない四五〇円の残金があったので次の会費に充当します。

(八幡浜 玉井記)

× × × × × × × ×

お知らせ

本年五月廿一日開催の電電公社退職者団体連合会第一回総会、同理事会に出席されました毛利副会長の報告書に次ぎのようなことが記載されていました。

九州連合会からの要望事項として

① 恩給年金の退職年次別格差及び恩給年金と国家公務員給与水準との格差を是正のうえ、公務員給与に即応してスライド制を早急実施されたい。

② 遺族、傷病者、老令者の厚遇措置を構ぜられたい。

③ 普通恩給権を得て、外国政府職員等となる前の公務員としての在職年限に達し、恩給受給権を有していた者についても之が職員期間の加算制限を撤廃されたい。

④ 外地における外国政府職員として在職し、抑留又は留用された者に対する抑留、又は留用期間を恩給期間に通算するよう措置されたい。

右要望事項について全国連合会内に分科会を設けて、公社の年金恩給担当者を加えて個々の実態を

点検し詳細に検討して改善の方向に持って行きたいとのことでした。

※十月の十日頃、全国連合会の事務局から恩給年金受給調査表を送って参りました。それには、退職年度、退職時の勤務局所、在職年限、恩給年金受給額等の欄があるものです。当連合会の会員の約一〇%の方々にこの調査表を急送してそれぞれの欄に記入の上ご返送願うことにいたしました。これなども上記調査の中の一つではないかと考えられます。

※恩給年金が改定になりました。本年度は八・七五%上昇ということです。この八・七五%という数字は「仮定俸給」をもとに算出された年金額に対するもので、昨年改定された方(その以前改定された方は当然のことです)のものは完全にその数値になる筈です。

今年初めて改定になる方の内にはその率に達しないこともあるのかと思います。この会報をご覧になるより先に通信局からお宅の方へ通知があることと思いますが、念のため参考事項と併せてお知らせいたしました。

編集部

電友会会費の増額に

ついて

編集部

当愛媛電友会は創立以来、会費は一人年額で六〇〇円でしたが、最近の物価高の関係もありますし、電友会活動の上にも、全国連合会関係の経費と、当会の事務所が近く設置される運びになりました(この事務所は会員同志の集合、懇談の場所にも利用したいものです。このことで数年間通信局との交渉に当られた会長の努力に深く感謝いたします)ことでこの保持管理に要する経費等の関係もございまして、現在既に予算の上では支出超過になっているようでございます。

物価高のことはひとまづ別にして、電友会活動としましては恩給年金の改定その他退職者の福祉増進の面においても全国的な統一組織が出来たことからこの活動を一層強力に推進させなければなりません。そのためには連合会本部への分担金、全国連合会総会、理事会への出席旅費等が必要不可欠のものとなります。次ぎに事務所の保守管理のことです

が、全国連合会、四国各県の電友会（名称が社友会、温古会等あります）その他中国、九州、近畿等の連合会、更には県内各会員の方々との通信連絡等の事務もありま

すし、できることなら常時誰かが当直したいものです。常時当直者を置くことは費用の点から難かしいかと考えられますので、とりあへず当分は（最小限年内は）中旬十日間（日曜祝祭日を除く）当直することとして更に理想的な方策を考究することといたします。

そこで大ざっぱに見まして分担金五、〇〇〇円会議出席旅費四〇、〇〇〇円（本年度支出額）と事務所費用、日当五〇〇円、弁当一〇〇円交通費六〇円との合計額が従来より経費が嵩むことになりました。

40,000+5,000+{(500円+100円旅費分担金 日当 弁当代+60円)×8.5×12}
交通費 十日間一年にして
=111,120円

右の概算額を会員一人に割り当てますと約五五〇円ほどになりますから総会でおはかり致しますが従来の年額六〇〇円（月額五〇円）を年額一、二〇〇円（月額一〇〇円）に改定させて頂きたいものです

でございます。どうぞ諸々の事情をお考へ下さいましてよろしくご協力おねがいしたいものです。

随想

愚陀仏庵雑記

高橋 林二郎

漱石ゆかりの松山中学校跡
夏目漱石は、明治廿八年、ここで英語を教えました。

名作「坊っちゃん」は、松山中学校を舞台にして書かれました。

四国電ビル新築にあたり、往時校庭にそびえていたユーカリの一樹をそえて記念碑を建立します。

松山を去るに際し

わかるゝや一鳥啼いて雲に入る

漱石

昭和三十七年十月廿三日

日本電信電話公社

四国電気通信局

明治廿五年七月の末、夏目漱石が松山市の正岡子規の実家を訪ねた。当時、子規、漱石はともに東

京帝国大学の学生であったが、夏休を利用して相携えて中仙道を下り、途中京大阪の名勝を探り、岡山まで同行した。岡山には漱石の次兄栄之助の夫人がおり、漱石は子規と別れてしばらくそこに滞在した。数日後、漱石は子規との約束を果たすため、海を渡り、丸亀を経て松山まで脚を伸した。

さきごろなられた郷土史家影浦稚桃翁の手記によると、子規の母堂は松山名物の五目寿司をつくって馳走した。漱石は大学の服装いかめしく、上衣の襟を正して端座し、一粒も残さず食べてしまった。これに対して子規はあぐらをかき、ぞんざいな風で箸をとった。漱石が愛媛県尋常中学校（後の松山中学、現東高）の英語教師として赴任してきたのは、それから三年後の、明治廿八年四月であった。

そのころの学士といえは、それはいしたものであった。殊に漱石は数すくない英文学者の一人として、その去就が注目された。にもかかわらず四国の片田舎の中学を選んだことについて、従来からいろいろいわれているが、格別深い仔細があった訳ではない。た

だ、長兄の太一、次兄の栄之助が相ついで肺病で倒れ、彼自身も医師から軽い肺患を診断されていたので、保養の意味もあり、また、校長の住田昇の月給が六十五円であったのに対し、新任の英語教師が八十円という当時であっても破格の厚遇で迎えられ、いやとはいえなかったであろう。

ベースボールを野球と直訳したのは正岡子規だといわれているが、松山時代の漱石は道後温泉の入湯と散歩、たまに道場に出て大弓をひく程度で、もっぱら健康保持に努めている。ここで注目したのは、子規、漱石の性格の相違である。松山藩士正岡隼太の長男に生れ、漢学者大原観山を外祖父に持つ子規が、病弱に屈せず天馬空をゆくのがあったのに対し、東京の下町に育った生粋の江戸っ子の漱石が、几帳面で潔癖でさえあったのは、おもしろい対照であった。

ところで、子規が漱石の仮寓愚陀仏庵に同居したのは、明治廿八年九月から十月にかけての五十五日間であった。この年の四月、子規は日本新聞の従軍記者として渡満したが、戦地に到着前に停戦と

なり、一発の砲声をきくこともなく帰国の途についた。しかし、この従軍で病弱の子規は更に衰弱が加わり、咯血がつづいた。やむなく須磨保養院に入院し、八月小康を得て松山に帰った。はじめ母方の大原恒徳かたに落ちついたが、まもなく漱石の下宿愚陀仏庵に腰をすえた。

子規の友人柳原極堂の談によると、子規を迎えた郷土の俳人たちは、彼をかこんで連日のように句会をひらいた。漱石ははじめこれをよるこばぬ風であったが、いつの間にか夫子自身運坐に加わるようになった。この秋、漱石は河内の白猪滝、唐岬滝にあそび、つぎの句を詠んだ。

雲処々岩に食ひ込む紅葉かな
荒滝や野分を研で捲き落す

秋の山いでや動けと瀑の音

松山中学における漱石の教育態度は厳格であったが、懇切でいねいな教えかたで俄然生徒の人気をあつめた。俳人の松根東洋城、医師の真鍋嘉一郎らはそのころの教え子であった。前記の影浦稚桃もその一人であった。生徒が教師にあだ名をつけたり、数え歌にうたひこんだりする風潮はいまも昔も

変りはないが、鼻先にすこしあばたのあった漱石は「七つ夏目の鬼瓦」と歌われた。

漱石は、明治二十九年四月、熊本第五高等学校へ榮転した。冒頭に掲げた「漱石ゆかりの松山中学校」の記念碑に彫りこまれていた別離の句が、このときの感懐であった。余談になるが、このとき彼が友人に書き与えた漱石自筆の句が、現在西条市にお住いの某氏の手許に秘蔵されているが、これには「漱石」という落款はなく、あきらかに「愚陀仏」の号が使われている。思うに、これは建碑の衝に当たったかたたちが協議のすえ「愚陀仏」を「漱石」に置きかえたのであろう。

このように、漱石の松山在任は満一年を過ぎなかったが、彼にとっては思い出の土地になった。彼の生涯の伴侶となった鏡子夫人とは、挙式は熊本に渡ってからであったが、話がまとまったのは松山時代であった。また、彼が愚陀仏庵で子規に指導をうけた俳句は、彼にとっては余技の域を出なかったが、後年の文筆生活に深いつなかりをもっている。

漱石は、大正五年十二月九日、

宿病の胃潰瘍で歿した。五拾才であった。主治医はかつての教え子真鍋嘉一郎がこれに当った。真鍋さんは西条市の出身で、そのころすでに物理療法の大家として医学界に令名があった。漱石が政府から贈られた文学博士の称号を拒否した話は有名であるが、真鍋さんも生涯学位をもたなかった。漱石をまねたわけではあるまいが、この師にしてこの弟子ありの感が深い。

永き日や欠伸うつして別れゆく
漱石

あッ! 危い!! 死神とすれちがい

二神 武弘

(一)

一九二三年九月一日は土曜日で午前中に四講時の授業がある筈であったが、東京市神田区表猿楽町の有終館の二階で前晩おそく迄何か読物に熱中した疲労がたたって、予定の時刻に起床出来なかった。欠課届けを同宿のM君に託して翌日の日曜と連休をきめ込み、落ちついて読書の醍醐味を満喫す

ることにしたのだった。

とかくするうちに俄かに驟雨を伴うた突風が襲来して直ぐあがる。と、当番の女中さんが廊下にしぶき込んだ雨水を拭きに上って来た。「あら! びっくりしたわ、今日は休みでしたの? まあ、何だつて変なお天気でしょうかね。今日はお朔日(ついたち)で朝早くお姉さん達と一緒に明神様へお参りした時は、とても好いお天気で気持ちよかったのに……」

やがて十一時前に帰って来たM君はや、やむくれた顔で、「君は全く幸運児だよ、今日の講義は二時間だけだった。しかも碌でもないK講師の保健漫談でお茶をにごされたんだからな。皆なぶんぶん憤慨したよ。内閣はまだ首班がきまらないんだね……」と云い乍ら神保町で買ってきた新聞(萬朝報)を机の上に投げた。その社説は「犬養自信ありや」と云う表題であった。

「Mさんもお帰りになったし、少し早いけど混まないうちに、お食事を持って参りました」、と女中さんが二人の膳を運んだので寛いだ土曜の早めの昼食を、雑談しながら将に終はろうとする時、グス

ッ!と気味悪い強い震動が通って家が動いた。「あっ!地震だな!」と二人が顔を見合はした瞬間、つづいて強震、激震の連続急襲が刻々に猛威を増した。遠くから津波のような地鳴りを伴って激烈な上下動の波状攻撃で、坐していることも、腹這になっっていることも出来ない。忽ち部屋は真黒い土ぼこりで闇黒となり、家の裂け破れる音、屋根瓦や戸障子類の倒れ落ちるけたたましい騒音の中で、二人は揺り転ばされながら必死にもがいた。

ついに一大激震の轟音と共に、さしもの大木造建築は不気味な唸りをたてて倒壊した。腹這いのままで天井と畳の間隔は二尺に足りない圧縮状態となり、その間も絶えまなく続く激動により二尺の間隔は刻々に接近して圧死の危険は目睫に迫った。

互に暗やみの中で呼び交はし乍ら手を引き足を押して、かすかな光の見える窓際ににじり寄って辛うじて外側に出ると、間髪をいれないで又激震一過、窓の間隔は閉ざされ家は更に墜落して、べしゃんこになった。

危く命拾いをした二人は無言の

まま視線を交はして傾いた屋根に立つと、あらゆる建物は悉く倒壊、傾斜して惨たる光景に加うるに救助を求める圧死寸前の阿鼻叫喚、忽ち四方にあがる火災の猛煙……帝都東京は一瞬にして阿修羅の地獄に化した。

紅蓮の煙を潜って街路に出ると、汚れた服装(みなり)で跣足(はだし)の群衆が猛煙で天日暗い都大路を右往左往、渦巻いて動いていた。

餘震が間断なく続く中を宮城近くの堀端通りへと急いだ。大蔵省、内務省、警視庁等が次ぎつぎに焼失する大猛火の夜更けの空には十日ぐらいの片われ月が、流れる煙の中に見えかくれして、下界の苦悶を嘲笑しているように感ぜられた。

私たち一行は其の晩の深更、赤坂の高台にある大倉喜八郎氏の別荘に避難する交渉が出来て、乱れ飛ぶ火の粉の下をくぐって二日の夜明け近く辿り着いた。女中さん達は、朝日の朝参りに行って無事息災を祈願した直後の震災だけに、「あのお姉さんは家の下敷になつて焼け死んだのだ、神も仏もあつたものか……」と泣いた。有

終館の他の犠牲者の名を拾い挙げて主人の提唱でお題目をあげた。

二日ばかり経ってM君と日比谷公園まで歩いてみると、戒厳令下、軍の救恤活動の握り飲の炊き出しに長い列をつくる群衆を見た。飢えに泣く三人の幼児を連れた乱れ髪の若い主婦、淑たる着こなしの令嬢母娘、曲つた腰を杖に支えた老人、堂堂とした風采の中年紳士等等……東京の狂い乱れた姿を見せつけられた。

公園の入口に貼り出された、初めて出た新聞の特大活字の見出し語は「三百年の文化一睡の夢・墓場に化した大東京」であつて、びつたりと実感が出ていた。

M君と二人が汚れた浴衣、びつこの履物、一枚のタオルを腰にした服装で九月六日の午后、日暮里駅で避難列車に押し乗り、大混乱の中央線を迂回して、名古屋駅前

の広場の藁の藪とんに安堵の夢を結ぶまでに、列車沿線の到る所で目撃した、避難者の墜落惨死体の悲痛な光景も亦忘れられない記憶である。

(二)

ティモア・サン紙の所有者で富豪の冒險家、オランダ系の米国人バノン・リアー・ブラック氏が、自分の愛機メリーランド・フリーステイト号で世界周遊飛行を試みた。四十年前昔の壮挙で当時世界の航空界が注目した豪遊であつた。

京城に向つて上海を立つたという連絡を受けたので、関係者と飛行場に急いだ。その頃の飛行場は現在のソウルの金浦空橋ではなくて、京城郊外の漢江流域に沿うたデルタ地帯の平坦部を地ならしして急造した草原地で、勿論舗装した滑走路や司令無線室の施設などは全然なかった。物置のようなみすばらしい事務所の手横に、風見標識用の赤白の吹き流しが一本立ててあるだけで、名称も土地の呼称で汝矣島(じよいとう)飛行場であつた。

当日は幸に無風快晴、到着は予定よりも早い見込みで、往來には車もめつたに走らない時代だったから、一行は全速で疾走した。京仁街道から飛行場へ逸(そ)れる田舎路には、鉄道の京仁線を跨がる踏み切りがあつたが、これも遮断機はもとより注意の表示さえ無い呑気な時代であつた。而かもこ

の辺りは鉄路が、小松の疎らに生えたなだらかな丘陵を迂回して平坦地へ出る下り勾配になっていて、飛行場に向って右方は見通しの悪い、謂はば魔のクロッシング・ポイントであった。

心急ぐ一行の車が踏み切りの線路に乗った刹那、右手十数メートルに京仁下り列車の広軌用大型蒸気機関車が物凄い轟音を立ててまっしぐらに驀進して来るのが、ちらつと目についた。

「あっ!!」と異口同音に絶句した間に合はず、列車は自動車の前部に激突して走り去った。

しかし、天命なるかな、車体は列車にひっかけられないで、ちょうど踏み切りの左側にあった送電用の鉄塔の根元に支えられて転倒も免がれ、車体の前部をめちゃめちゃに破壊せられただけで、一行六人は千死に一生の無傷の命拾いをして、呆然自失の視線を交換した。

附記

話中に出したブラック氏はワシントン海軍会議(日英米仏)に集った各国代表団を私邸に招待、数寄を凝らした大園遊会を催すなど民間外交家としても有名であった。

た。京城から大阪に飛び朝日新聞の村山龍平氏と同業の交歓を深め、日本朝野の歓迎を受けたが、その数年後、大西洋でヨット操縦中に誤って海中に落ち、アメリカ海軍の海空両方面の搜索協力も空しく遺体は発見出来なかった、と聞いている。

(三)

一九四三(昭和十八)年十月と云へば、太平洋戦争に突入してから既に一年十ヶ月ほど経ち、真珠湾奇襲攻撃とマレー沖海戦の華々しい戦果に湧いた初戦のバラ色の夢も、ミッドウエーの悲壮な敗北のあとは、週毎に月毎に期待の色は褪せて、全国民が最後の信頼をかけた聯合艦隊も、日本空軍の頽勢と戦域の拡大によって海の守りとしての使命を果す実力はなくなっておった。

敵の潜水艦は豊後水道から対馬海域に日夜自由に出没して、本土と満鮮間の輸送の安全は確保出来なくなった。連絡船は昼間は哨戒機に護衛され、夜間は深夜出港して消灯のまま島伝いに、目測の盲航行で魚雷攻撃を避けなければならなかった。

こんな危険情勢下、昭和十八年

の初秋、或る公用で京城から鹿児島まで旅行することになり、幾年振りかで博多に上陸してみると、沿線の黄緑色の稲田は初秋の陽に映えて、飢えた目に実のりの秋は楽しかったが、駅弁も新聞もたばこも、売っているものは何一つもなかった。内地は外地以上の物資窮乏のように思えたのであった。

雲仙の旅館の見晴台で浴後の涼をいれていると、セルの単衣に上品な紺緋のモンペ姿の中年の主婦が「新聞もおくれたり、来なかつたりで、これ昨日のでありますけれど……」と差し出された半べらの紙面に何気なく目を落すと、新造の大型連絡船「こんろん丸」が敵の潜水艦の魚雷で撃沈された、という記事があった。

その惨事の時刻と水域から推定すると、自分の乗船が釜山から博多に向っていたコースは「こんろん丸」遭難現場から、余り遠く隔ってはいなかった筈であった。

若しアメリカ潜水艦が撃沈直後に浮上して、現場の照明撮影、海中にもがく遭難者の掃射等の悪魔作業に熱中しないで、艦の使命遂行に専念していたら、自分の乗船も一発の魚雷で海底の藻屑となり、

只今此の記事は書けなかった筈である。

関東大震災、列車と車の激突、潜艦攻撃圏内の危険航海と前後三回の死神とのすれちがいは、天祐か偶然か両者の正面衝突を免がれて生き延びて来たが、考えてみれば人間各個の生死の分岐点なんて全くはかなく機微なものである。

日常生活で衛生、運動、用心等により個体としては十分保健に努力してみても、必ずしも長寿息災の保証とはならない社会生活の現実で、老境人は短かい余生の安心を如何に求め得るか心寂しい繁栄の時代ではある。

「無免許、酔っぱらい運転で老人を轢き殺して逃走……」という放送や記事には感慨一入である。あっ!危い、電友会の皆さん、御用心を願います。

(一九七〇、五、二二)

ていれぎ

松山 山崎義巳

一万歩行進という言葉がはやり初めた頃のことでした。私も退職

後の一日、この一万歩行進に四国霊場の札所西林寺詣でを思いつきました。

久米の八幡さまの前を学校の方へ、更に穂麦の道を幾曲りかして竹藪を廻り目指す西林寺に着きました。拝札を済まして前の小川の橋もとに腰を下し下を見ると、小さいな立札が立っています。「ていれぎ取られません」と、よく見つめるとなるほど綺麗な水の底に、二葉か三葉つけたなよなよした葉が生えているのです。あのピリッとした風味のよい「ていれぎ」の生えている姿は又なかなか可愛いものだなと思いました。ていれぎの 水の岸には

花豆茶 拙作

伊予史談論考に伊予節の歌詞の説明として

「高井の里のテイレギは温泉郡久米村高井、西林寺の辺の杖ヶ淵に産するものである。昔弘法大師が巡錫して此処に来られた時、水が乏しいと訴える里人のためにこの地に杖を立てられたのである。すると忽ち滾々と清水が湧き出したのである」と。

この「ていれぎ」も最近では段々少なくなっていると新聞は伝え

ています。何としても由緒のあるこの伊予の名物、いついつまでも残して置きたいものの一つでございます。

短歌



追憶 (二)

松山 藤田 基孝

雇はれて郵便局に日々通ふ
日給二十九銭の少和吾なりき
音響器耳に引き寄せ受信しき
へボカワレと言はるるを苦にし

モールス符号叩けば相手に
クソへボと言はれ励みき少年吾は

白き手のいたくつめたき
処女なりき四十年を距てて思ふ
活動写真の弁士の声も空ろにて
汝が手握りし冷たかりにし

まぼろしの如く晋れゆく
三津の浜に語りし君も

老にけらずや

年若く父となりしを友ら笑ひ
吾に「おとう」の綽名つけにき

弁当の仕出しに馴染む局の前の
大洲屋のおばさんも年経て今亡し

夏の夜を大洲屋の二階に騒ぐさま
仕事さぼりて窃かに覗きし

音響器の鳴り止みし夜半忍ぶごと
電話交換の室にゆきしか

焼芋の温かき持ちて行く夜さは
交換室の処女みなよろこびき

月々の加算の銭に心引かれ
父となりし吾は検定試験を受く

子らみな成長せし頃
制度出来し家族手当も

空しかりにき

従軍の心決めしは保険課の
仕事のがれむため

のみにもなかりし

焼夷弾の降る町に妻を残したれば
駆ける吾が足すくみ動かず

焼夷弾くぐりて行きし郵便局は
赤き焰に包まれてあき

戦闘帽に握り飯もらひて妻や子の
帰り持ち居き焼跡に佇ちて

防空壕に命助かりし鶏を抱へ
この堤さまよひき家焼かれし夜に

戦災の灰かき分けて焼釘を
拾ひてくれし娘もすでに亡し

誰がつけし綽名ともがも今に友は
吾を「おとう」と親しげに呼ぶ

長病みて臥す沈辺ににじりより
励ましくれき嬉しかりにき

西の空に淡き星見ゆ加茂の山に
わが子を焼きし宵のごとくに

過ぎ去りし吾が愛恋をいつまでも
そう一徹に攻めてくれるな



嗚呼小崎さん

松山山崎義巳

日本海々戦の「敵艦見ゆ」の新聞電報を、当時の松山郵便局の電信室で受信された小崎さん―二省分離直前の松山通信局臨時調査部長として、青年時代青雲の志を胸に秘め、戦時の電信業務に精励されていたその松山に帰任された小崎さん―。

三年前の松山電報局出身の集いで、小崎さんからあの当時の電信が、いかに重要な業務で、又いかに忙しいものであったか、詳しく伺ったものでございました。

小崎さんは退職されてから、電信電話工事協会四国支部にお勤めの上、この愛媛電友会の会長として数多の退職者の余生の生活指導、退職者相互の共助友愛活動に専念せられていたのでございました。

小崎さんが亡くなられる三日前に電友会からとして会長に私も同行してお見舞に参りましたが、その時小崎さんは昏睡状態とのことで、お目にかかれず帰りました。が、何だか、お義理を済ましただ

けのようで、何にもできない申訳のないこと、言いようのない無念さに胸をかきむしられるようでございました。

小崎さん―、八十才はたしかに短命とは申せませんが、私等は、長久、温雅、清涼、深い―味わいを、自らの性に持たれる貴方を敬いもし羨ましくも思っておりました。その貴方にはせめて米寿（八十八才）いや白寿（九十九才）まで、私等退職者のため「斯く生き延びよ」と先頭に立って号令して頂きたかったのですが―嗚呼。

小崎さん―。人間は月に行きましたが、まだ生体人間は霊界に行くことは出来ません。二十一世紀までには私等が今のまゝで、貴方にお目にかかって、その後のお暮しのことをお聞きしたり、又私等の世界のこともお話し出来るようになりたいものでございます。

どうぞ、それまで霊界でのご日常がこの上なく平安であらせられますことを祈り冥目合掌いたします。南無阿弥陀仏。

.....○.....

 編集後記

山崎生

皆さんお久しぶりでございます。松茸のおいしい時候になりました。私の内にも、いちじくが赤い口を開け、柿も色づき初めました。秋は一年中で一番物のおいしい時のように思います。総会が近づきました。久しぶりにお会いして積るお話ができることは本当に嬉しうございます。

永いことお世話になっていました小崎さんが月余の患いで亡くなられました。からだつきも丁度ころあいに瘦せておられ、素人目にも長寿のお人と見えるお方でございましたのに―いつまでも、いつまでもあの清涼高雅なお人柄に接したいものと思っていましたのに―惜しいことでございました。みんなで慎んでご冥福をお祈りいたしましょう。

会費の増額については電友会の活動を強化する上でもやむを得ないことのように思われます。どう

ぞご協賛をお願い申し上げます。年金の改定が行われました。私もその恩恵に浴したものの一人でございます。全国連合会本部では物価の上昇、公務員給与の上昇に応じた額の引上げを要望するよう資料の取纏めを行なっているようでございます。

来年初頭には当会の事務所もできることになりました。松山にお出になる方はそのおついでに、松山在住の方は再々お寄りになって戴きたいものです。碁、将碁ぐらいいは置いて、お茶など差上げられるようにしたいものと思っております。

総会が済むと今年ももう間もなく過ぎ行くこととなります。

生長を希うことは人類否動植物の本能かと思えます。今を誤らず、今日を正しくつましく、明日を惑わずたくましく生きて行きたいものでございます。お病気の癒えの進まされることを祈りつゝ筆を擱きます。

